準備号
【R18】獣人と執着　小説アンソロジー
ヒロインは獣の愛に囚われ、
もう逃げられない
蜜色カンタービレ

海に面した王国・パルメーア
元々は人族の国であった彼の国は
海路による交易により
獣人との友好を深めてきた
時を経て人族と獣人の交わりも
珍しいものではなくなり――
強い想いに囚われる
乙女たちの物語が
今、始まる

目次

なりそこないの恋と獣／マチバリ
かわいいあなた／待鳥園子
夫婦喧嘩は犬も食わない／赤井茄子
名伏し難い二人の関係／和泉和歌
奪われた身体から始まる想い／水野恵無
人魚はその熱に溶かされる／桜月みやこ
シロツメクサの王冠を貴方に／椎名さえら
奥付

なりそこないの恋と獣

マチバリ

穏やかな海を臨む平和な王国、パルメーア。

サフィールはその国の末姫として生を受けた。既に成人した兄姉もいる中で生まれた小さく可愛い妹姫は皆に愛され、誰よりも大切にされた。

海に沈む夕日のような美しい赤毛と、真昼の海のような明るいブルーの瞳。どこまでも愛らしいその造形を誰もが褒め称え、可愛らしいと褒めそやす。

しかしサフィールは自分の容姿が一つも好きではなかった。

なぜならば、彼女の耳はシンプルなものが顔の左右にひとつしかなかったし、鼻だって平凡な鼻梁がつつましく顔の中心にあるだけ。歯列は揃っているが牙のひとつもない。木を削れるほどの爪もなく、優しく体に巻きつけられる尻尾の一つもないのだ。

「どうして私にはお姉さまやお兄さまのような獣人らしい特徴が何一つないのかしら」

この国には人族と呼ばれる一般的な人間の他に、さまざまな獣の特徴をその身に宿した種族が暮らしている。他の国では彼らを獣人族など呼んで蔑視する傾向があったが、ありとあらゆる人や物が流れ着くこの国では彼らもまた尊い国民であった。

その国を治める王家は、懐の深さを示すかのように積極的に異種族との婚姻を受け入れており、現在の王さまも人族とはちがうコヨーテの耳を持っていた。

両親が異なる種族の子どもは、そのどちらかの特徴を受け継いで生まれる。王家は過去

にさまざまな血族を迎えた影響からか、親に似ず先祖がえりになる者も多かった。ただし稀に例外もあり、王族だと言うのに、なんの特徴もないただの人族として生まれてくる者もいる。

それがサフィールだ。

サフィールは父兄のように毛並みの良い耳もなく、母姉のようにするどい牙や爪の一つもない自分が大嫌いだった。まるで私だけ貰われてきたかのようだわ！　というのが彼女の口癖で、そんな小さな姫を愛らしく憐れと思った周囲は彼女を存分に甘やかした。

そんな環境は、生来気が強い彼女の性格に拍車をかけ、物心がついた時には誰もが手を焼くおてんばに育ちあがっていたのだった。

「はじめましてサフィール姫さま」

決して大声ではないのにその声は良く響いた。

「サフィール。彼は僕の友人で今日から近衛騎士になるティグリスだ。仲良くするんだよ」

王太子である長兄が連れてきた人族の青年は背が高く、彼の顔を見上げるためには首を大きく傾けなければならなかった。

周囲から「小さくて可愛らしい」と言われるのが大嫌いだった私は、そのことが腹立た

しく、思わず尖った声を上げる。
「私に挨拶するのに立ったままなんて失礼だわ！」
私の物言いに兄が眉をひそめたのが見える。またあとでお小言を言われるかもしれないと内心焦っていたが、口にした言葉は取り消せない。
「はは、それは失礼いたしました」
当然怒ると思っていたその青年は、私の言葉に怒るどころか朗らかに笑い、きびきびとした動きで躊躇いなく私の前に片膝を付いた。
「改めまして。はじめましてサフィール姫さま。本日より近衛騎士団に配属になりました、ティグリス・プルトガリーでございます」
金色の瞳が真っ直ぐに私を見つめていた。
少しくすんだ金の髪をしているのに眉毛だけが黒く、精悍な顔つきの中に輝く大きな瞳は太陽のように優しい温かさをたたえている。高い鼻梁はかたちが良く、厚みのない唇は薄く微笑んでいた。
「そ、そう」
普段ならばここでケチの一つでもつけてやるところなのに、私は何故か何も言えなくなって視線をそらす。彼の真っ直ぐな視線を見ていると胸の奥がむずむずとしたような落ち

着かなさを感じたからだ。

「サフィール、お前はどうしてそう……すまないな、ティグリス。ついみんなで甘やかしてしまって、もう十二歳になるというのに、まだまだ子どもなんだ」

「お兄さま！　私はもう子どもではありません！」

「十二歳はまだ子どもだよ。しかしもう淑女としての振る舞いを覚えておかなければいけない年頃でもある。サフィール、そうやってすぐに口調を荒げるのはやめなさい」

「……ふん！」

父そっくりのコヨーテの耳を持った兄は優しいが時折こうやって厳しくもある。

本当は自分でもそろそろ改めなければいけないとは分かっている。たとえ政治には特に関わりのない立場にいる末姫とはいえ一国の王族だ。それにふさわしい存在であれ、という家族からの視線はそろそろごまかしがきかなくなっていた。

小さくて可愛らしい子どもである間は許された事が、何故大人になると許されないのか。たとえ大人になった所で、私は王族らしくなんてなれないのに。

「……まったく。ティグリス、少々気が強いが、根は優しい子なんだ。よろしく頼むよ」

そう言って兄は用事があるからと去っていく。

当然、兄について行くものだと思っていたティグリスは、何故かまだ私の前に片膝を付

いたままだ。
「……いつまでそこに？」
「まだ立ち上がるお許しを得ていないので」
「！」
なんて意地悪なんだろう、と私は頬が熱くなるのを感じた。膝を付かせた私に対するいやがらせだわ、と文句を言おうと彼を睨むが、ティグリスの表情はどこまでも穏やかだ。決して私を懲らしめようとしている人の顔ではない。
「も、もう立っていいわ」
なんだか毒気を抜かれて、口にしかけた言葉を飲み込む。
ティグリスは私の言葉に従い、膝を付いた時と同様にすっと立ち上がる。そのまま立ち去ってくれるのかと思ったが、何故か私の前に立ったまま動こうとしない。
「……まだいたの？　まさか私が許すまでは傍にいるなんて言わないでよね。何の特徴もない姫でも一応、専属の護衛はいるわ。あなたはあなたのお仕事をなさったら？」
一息にまくしたてれば、ティグリスはその瞳を少しだけ丸くして私を見下ろしている。
流石に気を悪くしたかもしれないと居心地の悪さを感じる。
しかしティグリスは怒るどころか小さく笑ったのだった。

「なによ！」

まさか笑われるとは思っていなかった私は、反射的に彼を睨みつけていた。

馬鹿にして、と怒りを込めて視線を向ける。

「姫さまに特徴が無いなどと、誰が？　そんな不敬者がいるのならば俺が叩きのめしてやりましょう。あなたはとても愛らしく、我が国自慢の姫君ですよ？」

「っ！」

頬と耳が焼けるように熱くなる。

「ば、馬鹿にしないでちょうだい！　この国の王族なのにただの人族のなりをした姫なんて、つまらないにも程があるじゃない。あなただって獣人らしさの欠片もない私を見下しているんでしょう？　適当なお世辞はやめて！」

私は何故か泣きそうだった。

誰に言われたわけでもないが、周囲の視線が王家らしい家族を眺めた後、平凡な自分をみつめて「ああ」とでも言いたげに瞳を細めるのを何度も感じていた。

幼い頃、何度も何度も鏡を覗き込み、今日こそは耳が生えないか、牙が生えないかと期待に胸を焦がしていたのだ。しかし年頃になっても何の変化もない私は「平凡なお姫さま」という肩書きで生きてきた。それがどれほど私を苦しめているか知らないくせに。

「獣人らしくない、というのは確かに辛いものですね」
「わかったようなことを言わないで！」
「……わかりますとも。姫さま、俺の目をご覧ください」
「え」
ティグリスは再び私の前に膝を付いた。そうして私の真正面に顔を近づけ、その金色の瞳を大きく見開く。
「……きれい」
思わず感嘆の溜息が零れるほど美しい金の瞳。その瞳の中央がスリット状に細くなった。

続きは製品版にてお楽しみください♡

かわいいあなた

待鳥園子

「今回も全然ダメだった」
メイは自分の姉であるフィリスにそう告げると、薄い金属で出来たトレイを持って溜め息をついた。村一番の美男で、役場で働いている豹の獣人のケネスとデートしたのは昨日のことだ。
彼の振る舞いはとてもスマートだったし、モテるだけあり女の子の扱いに手慣れていて、ちょっとしたお話も上手だったので自分が彼の何が嫌だったのか、当の本人であるメイもわからなかった。
というか、わからないふりをしていた。
「……そうね、あんなにイケメンのケネスでダメなら、メイはもう誰とも付き合えないかもしれないわね」
「もうっ、お姉ちゃん！　真剣に聞いてよ」

パルメーア王国の片田舎エーレシタ村にある『月の雫亭』には二人の看板娘が居る。
姉のフィリスは真っ直ぐな黒髪黒目を持つ妖艶な美女だし、妹のメイはふわふわの栗色の髪と同色の大きな瞳を持っているいわゆる可愛い系の美少女だ。
エーレシタ村の近くには、初級上級問わず手頃なダンジョンが多く、冒険者たちがよく

滞在している。その冒険者たちからも、もちろんこの村の男たちからも、二人は熱い視線を浴びていた。食堂での接客中に声をかけられたり、どこかに行こうとすれば待ち伏せされるのは序の口で、邪な思いを持つ奴に襲われることもあった。それをいつも助けてくれるのは……。

カランと扉が開いた音がして、身を屈めてどこか入りにくそうに、大きな体が入って来る。姉妹の幼馴染、狼獣人のリアムだ。短く黒い髪の中には大きな耳がピンと立っていて、彼が獣人であることは一目でわかる。それに彼はこの村に駐在している騎士の一人だから、がっちりとしたその体は背が高く鍛えられていて筋肉も隆々としていた。

（……リアム。今日は来てくれた）

彼は騎士なので不規則な勤務だ。夜勤もあるから、店が開いていて時間の合う昼勤の時しか来てくれない。

そう……来てくれないのだ。

メイは彼の姿を見るだけで、心臓が跳ねてどうにかなりそうになった。昨日デートした村一番の美男であるケネスに、キスされそうになった時もそんな風な気持ちにならなかっ

たのに。

その精悍な顔でちらりと自分を見ているフィリスとメイの方を見ると、いつもの定席である奥のテーブル席に腰掛けた。姉のフィリスは苦笑して、いつものようにリアムが座った席に近寄る。リアムは何かフィリスに聞いて、彼女がそれに答えると仏頂面をぎこちなく綻ばせた。

（何よ。リアム。お姉ちゃんの前だからって、嬉しそうにして）

メイは思わず口を尖らせた。

ちいさな頃から散々モテてこの村の男たちを惑わせた美女であるフィリスにはもう婚約者が居て、それは家族ぐるみの付き合いのあるリアムも知っているはずだった。でも、この店に来るたびにフィリスと何か話しては、嬉しそうにしている。

自分が好きな人が、叶わない恋をしているのを間近で、見るのはつらいものだった。

フィリスと同い年のリアムはちいさな頃から無口で不器用だけど、二歳下のメイにもすごく優しくて、そんな彼に恋をしてしまうのはそう時間はかからなかった。

あの頃は「リアムのお嫁さんになる」と言ったら嬉しそうにしてくれていたのにと思うと、胸がずきんとした。

年下のメイより同い年のフィリスの方が共通の友達や話題も多い。楽しそうに話をするのは仕方ないのかもしれない。

（……でも、絶対私の方がリアムのことが好きだし、一見わかりにくいと思う彼のことをわかってあげられるのに）

声を抑えながら楽しそうに何か話す二人を見て、メイは複雑だった。

姉妹ではあるけれど、フィリスとメイは全然タイプが違う。それは当の本人である自分が一番よくわかっていた。もしリアムがフィリスのような女の人が良いなと思うならきっとメイのことなど眼中にないだろう。

リアムは口下手で不器用だけど、本当はすごくすごくすごく優しいのをわかっているのは自分だと、そうメイは思うのだ。

戦闘能力の高い狼の獣人だしあの一見怖そうな外見で誤解されそうだけど、リアムは言葉がすくないだけで、騎士になってから実家を出て一人暮らししている生活もきちんとしていて、誠実だし誰かに叶わない恋をしていなければ、今までそういう話は聞いたことはないけれど恋人の一人や二人、そう何人だって居てもおかしくないのだ。

フィリスの婚約者は隣街の富豪の息子で、結婚すればそちらに移り住むことになるから、

この村出身でその都合もあり駐在しているだろうリアムとはもう頻繁に会えなくなる。
そうしたら、残ったメイのことも意識してくれるだろうか。
一人しかいない姉のことは大好きだけど、彼女がリアムの近くから居なくなることを、心のどこかで望んでいた。
姉のフィリスが居なければ、残った幼馴染であるメイにも、きっとチャンスが巡ってくるはずだとそう信じたい。

「メイ？　何している。リアムのところに料理持って行ってくれ」
忙しく厨房の中で働いている父親から、訝しげに声をかけられてメイは驚いた。
ずっと考え事をしていたら、かなりの時間が経っていたみたいだ。
二人の方向へ視線を巡らせればフィリスとリアムはもう話していないし、彼はいつもの日替わり定食を頼んだ後で、その料理も用意されているようだった。
「……わかった」
隅の席に大きな体を座っている彼に近づける嬉しい気持ちを押し隠すようにメイは平静を装うと、用意された料理を片手に持ったトレイに素早く載せて歩き出した。ちいさな頃から食堂でお手伝いをしていたので、片手でトレイを持ちバランスを取りながら歩くのは

お手の物だ。今日の日替わり定食のメインメニュー、具沢山のシチューは彼の好物だってわかっていたから、自分にもあの笑顔を見せてくれるかななんて、そんなことを思いながら。

「リアム、おまたせ」

微笑んだメイがそっと丸テーブルの上に料理を置くと、リアムは何か言いたそうな表情で頷いた。そのどこかぎこちない様子に、メイはいつもと違って緊張している彼に問いかけた。

「どうしたの？　……何かあった？」

心配そうに顔を覗き込みながら首を傾げたメイを見て、躊躇うように口に手を当てて考えるようにすると、リアムは意を決したようにじっとメイを見つめて言った。

「その、フィリスから役場で働いているケネスとデートしたって聞いたんだけど……」

言いづらそうなその雰囲気を感じて、メイの心はドキンと跳ねた。

（もしかして、もうケネスと会うなって言ってくれるのかな……）

「あいつはあまり……良い噂がない。確かに良い男だが、もしまた会うつもりなら気をつけた方が良い」

その真摯な目は嘘を言っているようにはとても思えない。でも、どこかで落胆してしまう気持ちがあった。

（リアムが私とケネスが会ったことをどう思っているのかを知りたい……でも……）

「リアムには関係ないでしょ。昨日一度会ったところだけど、ケネスはとっても紳士で優しかったわ」

彼が発したのが期待した言葉とは違ったせいか、どうしても苛々した気持ちを隠せずにそう言ってしまった。その言葉を投げつけた後で、すぐに後悔してしまう。

普段表情をあまり動かすことのないリアムが、本当に悲しそうな表情を浮かべたからだ。

「メイ……」

リアムはそう言ってから、言葉を探すように俯いてしまう。

その姿を見て胸が痛んだ。彼は大事な妹分を心配してくれただけだ。心配した言葉を言い返されたのに傷ついただけだ。

世渡り上手の姉のフィリスだったら、冗談でも言ってこんな状況も上手くあしらえただろう。

（でも、私はお姉ちゃんじゃないもの）

ゆっくりと顔を上げたリアムの、その鋭い黒い目をじっと見つめる。人となりを知らなければ、怖いと思ってしまうかもしれない。でも、メイは彼が優しいことを誰よりも知っているのに。

「メイ！　そこで何しているの、早く注文取って」

「あ、はい！」

フィリスの呼ぶ声にはっとしてメイは自分を見つめるリアムから目を逸らした。

彼は視界の中から居なくなったはずなのに、何か言いたげなその表情が頭から消えなかった。

続きは製品版にてお楽しみください♡

夫婦喧嘩は犬も食わない

赤井茄子

それは、草木が芽吹く季節。陽光麗らかな春の日のこと。

「別居致しましょう、旦那様」

「……何？」

温かな風にそぐわない、些か緊張を含んだ声が執務室に響く。昼に片付けるべき執務を終えて紅茶を楽しんでいた男は、向かいに座った相手を呆然と見つめた。そして、しばし逡巡した後……もう一度、聞き返す。

「今、何といった？　ミマリ」

先程、男に手ずから紅茶を淹れてくれた妻――ミマリは、頭の上についた茶色い耳をふるふると震わせつつも、強く彼を見据えてもう一度、そのサクラ色の唇を動かした。

「私たち、別居しましょう。旦那様」

レースのカーテンを揺らした柔らかな風が、二人の頬を撫って消えてゆく。麗らかな昼下がり、その夫婦の間にだけ寒気が渦巻き始めていたのだった。

◇

ミマリは、完全なる政略でヴァスカビリ家に嫁いできた妻である。薄くなった獣人の血

を濃くする為に――――早い話が、お金で買われた獣人貴族の純血種だ。と言っても、頭に『弱小』という形容が引っ付いている。丸く小さな体躯、短く小さな牙、そして非力で有名な『マメシバ』と呼ばれる血統のせいで、社交界では散々揶揄われてきた。それ故、ミマリは純血というところ以外そんなに自慢する所はないと思っている。

犬の獣人といえば、獣化して颯爽と駆けてゆく姿を思い浮かべる方も多かろう。……しかしながら残念なことに、『マメシバ』はそんなに颯爽とは走れない。手足が短く動きも鈍な為に、獣化姿で走る様を「見ろよ！　毛の生えたボールが転がっている！」と何度揶揄われ笑われたことか！　あの時は羞恥と怒りのあまりご飯が三杯しか食べられなかったっけ。

そんな訳で、ミマリは夫の前で一度も獣化したことはない。

さて、ここで、彼女の夫の話もしておこう。

ミマリの夫、マヌエル・ヴァスカビリ――彼は、獣人と人間の間に生まれた混血の獣人貴族である。血統は『ドーベルマン』、靭やかな体躯、長い手足、スラリとした尻尾、そして鋭い牙をもつ彼らは、王家にも覚え目出度きお家である。特に現当主であるマヌエルは、戦闘力に加え領地経営にも優れた切れ者と言われているとか。

短く調えた黒檀のごとき髪、凛々しい太めの眉に、切れ長の瞳は闇を切り取ったような

漆黒。スッと通った鼻筋と、常に引き結ばれた薄い唇――顔の造形はかなり良い部類ではある。獣人の血は少し薄まったものの、その鋭い眼光はまさに戦闘種のそれ。彼こそはミマリが思い描き憧れていた、〝理想の犬獣人〟の具現!!　初めて顔を合わせた時は、感動で尻尾と言わず全身がプルプル震えた。

片や、その血以外は完璧なドーベルマン。
片や、純血だけが取り柄のマメシバ。

凸凹夫婦、猛犬夫と子犬妻、鬼に小鞠……外野からは散々面白おかしく評されたものの、ミマリとマヌエルは夫婦としてそれなりに上手くやってきた。待望の子も年子で三人、因みに全員雄である。子育てはそれはもう大変だったが、先日末の子がついに全寮制の学園に入学し、屋敷の中がやっと静かになった所だ。
そうして久々に得られた一人の時間。目を閉じて春の風を満喫していたミマリは……唐突に閃いた。
――そうだわ。育児も一段落したことだし、旅行に誘ってみようかしら。
仕事人間のきらいはあったが、マヌエルは当主として息子たちに体術や剣技の指導を自

ら買って出てくれた。たまの休みにピクニックや遊びに引きずり回されても、嫌な顔一つしない。いや、まぁ大抵彼は無表情というか厳しい顔をしているが、兎に角嫌そうな顔はしていなかった。そうそう、息子の反抗期には「もう一度ミマリを『糞婆』と呼んだ者は斬って捨てる」と長剣片手に諫めてくれたこともあったっけ。

ミマリとマヌエルは政略結婚で結ばれた間柄。情熱的な恋などなかったが、代わりに穏やかな信頼を育んできた。これからも夫婦二人、寄り添って老いてゆきたい。そんな気持ちを此処らで一つ、伝えてみるのも悪くない。柔らかく陽気な春の日差しは、ミマリをそんな気分にさせたのだった。

――――お互いへの労いということでひとつ、何処か長閑でゆったりした所へ尻尾を休めにゆくのも良いかも。例えばそう……温泉とか。

「確か、実家の方には評判の旅館があったわよね」

貧乏弱小獣人貴族なミマリは一度も泊まったことがないが、竹林に囲まれた高級温泉旅館があったはずだ。あの厳粛で静謐な佇まいならば、いかにも堅物な旦那様も気に入るであろう。

噂では、何と一室一室に温泉を引き、香りの良い木で造った露天風呂まであるとか。そうそう、食事も豪勢で、お頭付きの刺身から骨付きの炙り肉まで揃っているとかいないと

か。天日干ししたお布団はふかふかで、まるで天国のような眠り心地がするとかしないとか。

「むふふ、むふふふ……っ！　良い、最高じゃないの！　そうと決まれば早速旦那様にご相談して……いえその前に予約の空きを確認させて……」

ここまで考えたら居ても立ってもいられない。ミマリは早速、便箋に万年筆を走らせ始めた。実家へ手紙をしたためて旅館の名前を確認して、その間に必ずや旦那様を説得……いや、温泉旅行にご招待してみせる。

嗚呼、湯気けぶる温泉に美味しいご飯。静かな竹林にイグサの香りが呼んでいる。育児の疲れを吹き飛ばす、ゆったりのんびり旅ゆけば楽し。いざ行かん夢の世界へ――彼女の頭の中まで春爛漫になろうとした、その時だった。

「お、おおお奥様ぁあぁあぁあ!!　大変でございますぅぅうぅぅう!!」

血相変えたミマリの侍女が、一通の手紙を持って現れたのは。

続きは製品版にてお楽しみください♡

名伏し難い二人の関係

和泉和歌

鬱蒼とした森の中。折り重なるような樹冠の隙間からは、朝焼けの眩しい太陽光が差し込み、コレットはゆっくりと瞼を開けた。大きな窓越しに森からの気温差で発生した靄が森一帯に漂っているのが見え、ここが家ではない事を思い出していく。

「……っ！　……のど、いだぁい」

散々啼かされた喉は張り付き、痛みを訴えている。気付けば痛みは喉にとどまらず、股の間にはまだ異物感が残り、腰は疲労により悲鳴をあげていた。

横には、コレットをボロボロにした諸悪の根源が呑気に寝ている。

昨夜人間のくせに、獣人どころかまさに野獣と化してコレットを貪り食べた男を恨みがましく一瞥した後、膝を抱えて深いため息をついた。

「うぅ……あー、やばいなー。やっちゃったなー……」

致し方ない事態だったとはいえ、コレットは昨夜の事を酷く後悔していた。皮肉屋だが面倒見のいい兄のような彼の存在は、家族に恵まれなかったコレットの心の拠り所だった。

今更男女の仲として意識しながら付き合う事など想像出来ない。

「……よし、逃げちゃお」

長年自分の感覚に正直に生きてきたコレットは、隣の男が起きてきた時の気まずさに耐えられないだろうと思い至り、逃亡を決意する。善は急げとばかりに、ベッドからとうっ

と軽く飛び降りた。

バキンッ!!

軽やかに着地したはずの足元から硬質な何かが折れる音が響き、びくりと体が跳ねた。

今の音で起こしてしまっただろうかとベッドの上の男を恐る恐る伺い見るが、余程深い眠りについているのか身じろぎひとつせず、規則正しい寝息を立てている。ほっと胸を撫で下ろし、音源を求めてそろりと足元を見ると、男が普段からかけている黒縁眼鏡が無惨に折れ曲がり、レンズも割れていた。

「……うわー、さいあく」

常時すってんてんのコレットの財布の中身では、到底弁償出来ない。やむを得ない、これは尊い犠牲なのだと言い聞かせて、そろりそろりと自分の衣服をかき集め、森へと通じる扉へと手を伸ばす。

昨日は押そうが引こうが開くことのなかった扉は、手を触れるだけですんなりと開いた。

なんだか胸の奥が少しチリチリと痛んだが、その気持ちには見て見ぬふりを決め込み、コレットは兎の獣人らしく、脱兎の如くその場から逃げ出した。

◇

事のあらましは半日前の昼下がりへと遡る。
この時期の森の中は茹だるような暑さで、高湿度によって生じた陽炎が揺らめき、視界からも熱気が伝わり不快指数を上げてくる。ジリジリと鳴く虫の音が耳についてやけにうるさい。
「あぁぁーーーっ!!　もうっ、むり!!　暑っつーーーいっ!!」
コレットの声が森中にこだまし、反響していった。虫避けにと着ていた長袖の上着を脱いで、黒いブラ付きのタンクトップ一枚となる。上着に隠されていた華奢な肩と、その細さに見合わない立派な胸が、ふるんとたわわに揺れた。他に人がいれば絶対にしないが、気心知れた男相手に気遣う必要性は特に感じない。
「コレット……うるさい。慎みがないのも大概にしなさい」
男は冴えない黒縁眼鏡の奥にある碧眼で、コレットを迷惑そうに眺め嗜めた。
「ふーんだ。上着くらい、いいじゃん。それに、こーんな所にくる物好きなんてロイドくらいなもんで、そうそういませーん。……大体さー、この依頼だって、ロイドが大人しくわたしに今月の家賃分のお金を貸してくれさえすれば……」

「貴女に二ヶ月前に貸した三万メーアが、まだ返済されてません」
ロイドは目線も向けずに、ピシャリとつれない返事を返した。
「けちーーっ!!」
コレットはロイド目掛け、脱いだ上着をまるめて放り投げた。ロイドは「馬鹿を相手にするのも疲れる」とばかりに、盛大にため息を吐く。
「まったく、相変わらずだらしない。ちゃんと畳まないとシワになりますよ」
「……だらしないから投げたんじゃないし」
「貴女がのらりくらり借金を踏み倒そうとするから、僕がこの依頼を貴女の代わって受けたんだ。感謝くらいして欲しいですね」
ロイドはコレットへ嫌味を言いつつ、上着を拾い、手際よく綺麗にたたんでから汚れない所へと置いた。
「……まぁ、コレットには先日の空挺都市の遺跡調査に協力して貰った借りがあるから、こうして僕も手伝っているんじゃないですか。あとは、貴女の作る鳥の丸揚げに刻みネギをいれた甘酢のやつで正式に手を打ちます」
「……抜け目ないなー」
コレットは「まぁ、別にいいけど」とボソッと呟いて、また草刈り作業へと戻った。

二人の出会いは二年前に同じクエストを受注した事にある。大した任務ではなかったが、冒険者の頭数が必要で、同じギルド長からの紹介という理由だけで組まされた事がきっかけだ。

そのクエスト達成後にロイドはコレットに引き摺られるように飲みに連れ出され、無理矢理何軒もはしごさせられた挙句、泥酔し前後不覚となったコレットの介抱をする羽目になった。

それだけに留まらずコレットはなんと、ロイドの買ったばかりのシャツや上着を吐瀉物まみれにした上に、家までおぶって連れ帰ってもらうという醜態を晒した。当時のコレットの部屋は虫が湧くほどの汚部屋であり、その惨状を不幸にも目撃してしまったロイドは、もはやドン引きを通り越して驚愕し、何を思ったのかコレットの部屋を徹底的に掃除したのだ。

次の日、二日酔いで昼過ぎてからもそもそと起きてきたコレットが、下着以外の全ての服を洗濯機にぶち込んでいた為、半裸で自分の部屋を掃除しているロイドを発見し、悲鳴をあげた。

そんな彼女をロイドはまるで粗大ゴミを見るように見下し、雑巾をコレットの顔目掛け

て投げつけた。見事彼女の顔面にヒットしたのを見届けてから「早く、床の雑巾掛けをしなさい」と悪魔の様に低い声で強要されたのは、今となってはいい思い出である。

それからは歴史的価値しかなく、誰も見向きもしない古代遺跡巡りにコレットを無理やり付き合わせたり、目先の金に目が眩んだコレットの依頼をロイドが手伝ったりする、持ちつ持たれつの関係へとなっていった。

「コレットの料理のスキルが、他の家事に少しでも振り分けられてればいいのですがね」

「生命維持に必要なもの順に、わたしの家事スキルは振り分けられてるからねっ！　まず、一番大事な食事っ！　次にお風呂、次に洗濯……だーいぶ後にお掃除ね」

コレットは、ふふんっとドヤ顔をしながらふんぞり返った。

「……そんな恥ずかしい事、僕以外の他人の前で言わない方がいいですよ。品性を疑います」

ロイドは侮蔑にも似た目で女モドキを眺め、言い放った。しかし、彼女の料理の腕は確かな事は十分知っていたので、それ以上は何も言わずに作業へと戻ったのだった。

続きは製品版にてお楽しみください♡

奪われた身体から始まる想い

水野恵無

――ガタン。

目を瞑って自分の呟く声だけを聞いていた私の耳に、そんな音が聞こえた。ガタン、ガタン……。重い、まるで足音みたいな音がこっちに近寄ってきていた。気がつけば甲板の方の争っていた声は止んでいる。

迷いもなく近寄ってくる足音に、ベルントさんかと期待が湧く。けれどそれと同時にとてつもなく嫌な予感が胸に渦巻いて止まらない。ベルントさんは確かに船乗りらしく身体が大きくて体重もありそうだったけど、こんなにお腹の底にまで響くような足音をしていただろうか。

足音は真っ直ぐに近寄ってきて、そして部屋のドアが開かれた。ベルントさんだと信じたいのに、全身が凍ったように冷たくて動かない。

「ああ、ここだな」

零された低い声は知らない男性のものだった。この船の誰のものでもない。息をすることさえ恐ろしくて、私は顔を伏せて置物のように身体を縮めていた。

けれど目隠し代わりにと被っていた毛布がばさりと剥ぎ取られる。

思わず見上げてしまう。

「やっぱりか、やたら良い匂いがすると思った。こんな極上が隠れていたとはな」
「っ！」
ベッドの影を覗き込むように立っていたのはとても大柄な男性だった。背も高いけれど肩も広い、身体の厚みもある。それだけなら船乗りと変わらない。けれど肩に羽織った真っ黒なコートと無駄なアクセサリー、そして何より腰に下げられた存在を主張するような大きなサーベルが、銀色に見える髪の上にちょこんと乗っかった真っ白で丸い耳が、何よりも雄弁に物語っていた。
パルメーアの海で誰よりも恐れられている、シロクマの獣人。海賊船の船長だ。
予想もしなかった荒々しくも整った顔に、強い光を秘めた鋭い瞳に一瞬目を奪われる。しかしそれもシロクマ船長の腰のサーベルがガシャリと音を立てるまでの短い間の事で、恐怖が許容範囲を越えて頭が真っ白になった。
シロクマ船長はそんな私をじろじろと上から下まで何度も眺める。いつもだったらそんな視線、失礼だって言えたのに。シロクマ船長が顔を近付けて来ても身動き一つできなくて、首筋をくんくんと嗅がれた。
「いいな、お前。すげぇ、良い」
シロクマ船長がぺろりと唇を舐めるのを間近で見てしまった。その獰猛な笑顔にひゅっ

と喉が鳴る。逃げ出したいのに動いてくれない身体は大きな手に簡単に隙間から取り出されて、そのまま肩に担がれた。

「や！　やめて！　何するの!?」

「何って、俺の船に連れて行くんだよ」

このままじゃ駄目だって意識と同時にバタバタと足が動いた。けどまるで子猫が暴れている程度にしか感じていないのか、シロクマ船長はびくともしない。それどころかあんまり動くとスカートの中が見えるぞなんて、呑気そうに脅してくる程だ。

「エリーザベトお嬢様！」

「ベルントさんっ」

荷物のように担がれたまま甲板に連れ出された。そこには縄で縛られている船員の皆と、そんな皆を囲んでいる人相の悪い人達が居た。甲板に倒れている人もいなければ、ぱっと見大怪我をしているような人もいない。それは幸いだけれど、それだけの戦力差があるってことでもある。海賊達は皆を大きな怪我をさせる事も無く無力化し、縛るだけの余裕があるのだ。

その中でもベルントさんは先頭にいた。腕を切られたのか赤い血が流れているけど、命には別状がないように見える。

「お前、エリーザベトって名前なのか」
「気安く呼ばないでっ」
「さっきは顔を真っ青にして震えてたくせに、気が強いな」
「放っといて！　下ろしてよ！」
ばたばたとまた暴れるけど大きな身体はびくともしない。
「しゃあねぇな。おい、縄をこっちにも寄越せ！」
「カシラぁ、その子は？」
「俺が見つけて拾ったから、俺のモンにする」
「は？　そういうの、有りになったんで？」
「私は貴方の『モノ』になんてならないからっ」
一人の海賊が持ってきた縄を受け取りながら言われた言葉に、私は反論した。私は私で、物なんかじゃない。私を好きにしていいのは私だけで、他人にそんな権利なんてない。
私の主張を聞いてるのか聞いてないのか、多分気にしてないっていうのが一番の理由だろう。シロクマ船長は担いだ時と同じようにひょいっと私を下ろす。この隙に逃げないとって思ったのに、それよりも前に両手を後ろで縛られた。
「言ってるだろ、『例外』もあるってよ」

「は……？　か、カシラの『例外』がその嬢ちゃんなんですかいっ!?」

止めて、離して！　身体を捻って主張する私を無視して、シロクマ船長と海賊が好き勝手な話をしている。驚いた顔の海賊に指さされた。

「そうだ、だからコイツは俺が貰う。残りはいつもと同じように処理しとけ」

「やっ！」

腕を縛られた縄を引かれた。シロクマ船長が向かおうとしてるのはこの船に横付けされた真っ黒な海賊船だって分かって抵抗する。けれどもすぐにまた肩に担がれてしまった。

「エリーザベトお嬢様に触るな！　この賊ふぜいが！」

ベルントさんが言ってくれたけど、シロクマ船長は足を止めることも振り返ることもしなかった。ベルントさんも縛られたままで、さらにそこに海賊の一人が近寄って「うるせぇよ！」ってお腹を殴る。避けることも出来なかったベルントさんが呻いて倒れた。

その一部始終、暴力を振るう事に何の躊躇いもない海賊たちの姿を目の当たりにして、必死に張っていた虚勢が揺らぐ。「エリーザベトお嬢様」そうベルントさんが呟いたように見えた。

そこが船長室だっていうのはすぐに分かった。真ん中に置かれた大きなベッド、意外な

程に質の良い調度品。そして沢山の船から奪ってきたのだろう、価値のある品々がそこかしこに無造作に並べられていたから。

ぽいと簡単に放り投げられた。着地したベッドは柔らかくて痛みはない。けど『ベッドに落とされた』という一点にじわりと背中に汗が滲む。「自分が若い女性だということを認識してください！」ベルントさんに言われたことがガンガンと頭の中で響く。

「わ、私は海賊なんかの『モノ』になんかならないからっ」

後ろに手を縛られているせいで動き辛い。それでもどうにかずり上がって距離を取る。

お母さんとはずっと「貴女はどんな男性と結婚するのかしらね」なんて話をしていた。告白をされたことはあってもどの人もピンと来なくて、私はいつか出会えるたった一人を探していた。

それは決してこんな海賊じゃ、ない。

私がささやかに稼いだ距離は足首を掴まれて引っ張られて、簡単に無かったことにされてしまう。

「やっ」

「俺は好みの女に出会えたら絶対に自分のモノにするって決めてたんだよ」

「貴方の決意なんて知らないっ」

「知らねぇってこたないだろ。お前の話をしてんだからよ」
「あっ！　や！　やだやだ！」
身体の上に乗られて、そして服のボタンに手を掛けられた。遠慮も躊躇も無い手にぷつんぷつんと外されて、下着に包まれた胸を露出させられる。自分の身に起こっている事が信じられなくてくらくらする。

続きは製品版にてお楽しみください♡

人魚はその熱に溶かされる

桜月みやこ

ぐるぐると回る視界に、息を継ごうとすれば容赦なく鼻からも口からも入り込んで来る海水。

あぁ、僕はここで死んじゃうのかな――

いつものように水を掻いて水面に上がりたいのに、水を吸った衣服が重くてもがく事すらままならない。絶望に支配されていた意識が薄れ始めたその時、ふいにレイナルドの身体はふんわりと何かに包まれた。

「よく頑張ったわね、もう大丈夫よ」

朦朧とする意識の中、レイナルドが覚えているのは柔らかな声と、自分を守るように包み込んでくれる白い肌、そして珊瑚色の混ざった水色という不思議な色だけだった――

◇

「よぉ、レイナルドぼっちゃん！　恩人探しは捗ってるかい？」
「お陰様でちっとも進展なしだよ」
いい加減ぼっちゃんはやめてくれと付け足して、ぽいと放られた果実をキャッチすると青果店の店主に向けて反対側の手をひらりと振る。足を進めながら早速その瑞々しい果実に歯を立てれば、果汁が口いっぱいに広がって、美味いなと、今年も出来は良さそうだと、レイナルドは目を細めた。

ここはパルメーア王国の端にある海沿いの小さな領地・リナレス。
海に面してはいるもののリナレスに大きな港はなく、船の往来は地元の漁師たちが漁に出る程度。特産は海産物にいくつかの果物。いささかこれと言った見所の少ないリナレスは、それでもそこそこに観光客がやって来る。
パルメーア王国の近海は穏やかで暖かな為か人魚族の生息域で、そしてパルメーア王国は竜人族に次ぐ希少種である人魚族を保護対象と定めている。リナレス領の辺りではその希少な人魚族が波間で遊ぶ姿を、頻繁とは言い難いながらも見る事が出来るからだ。
店が軒を連ねるこの街で一番大きく賑やかな石畳の通りを抜けると、視界一杯に透き通

ったコバルトブルーの海が広がる。明るい金の髪をさらさらと揺らして緩やかに吹き抜けて行く潮風に誘われるように、レイナルドは海へと視線を向けると海面に、海面から覗いている岩に、視線を滑らせる。

幼かったあの日。「嵐が近づいているから砂浜へ行っては駄目よ」と何度も母親から言われていたのにその言いつけを破って、そうしていつもよりずっと大きな波に攫われて、幼いながらに死というものを覚悟したあの日。

レイナルドは気が付いたら自分の部屋のベッドの上に居た。

そうしてすぐに、恐らくは自分を助けてくれたのであろう女の人の声を、白い肌を、思い出した。荒れた海に飛び込んで助けてくれたのだろうか。その人はどこも怪我をしなかっただろうか。一体どこの誰だったのか。

会ってお礼を言いたいと言う息子に両親は困ったように眉を下げると、レイナルドの事を助けてくれたのは人魚で、もう海に帰ってしまったのだと言った。

そう言われたレイナルドは肩を落とした。人魚族はたまに海で跳ねていたり岩の上に座っていたりする姿を見るくらいで、天気の悪い日以外は毎日のように砂浜で遊んでいるレイナルドですら目の前で会った事も、ましてや話しなんてした事もない種族だ。

「でも父様は〝りょうしゅ様〟なのだから、その人を見つけられるでしょう？」

そう食い下がったレイナルドに父親は苦笑を零した。そうしてレイナルドの頭を優しく撫でながら「領主だからと言って何でも出来るわけではないんだよ。海で暮らす人魚をこちらから呼び出す事なんて出来ないんだ」と言われて、レイナルドはショックを受けた。

助けて貰ったお礼を言いたかったのに。

そして出来る事なら、もう一度あの柔らかな優しい声を聞かせて欲しかったのに。

あまりに消沈している幼い我が子に、両親は珊瑚色と水色はその人の髪の色で、人化してレイナルドを砂浜に上げてくれたのだと、少ないながらもその人魚の事を教えてくれた。

レイナルドはその時初めて人魚族も人化出来るのだと知った。

「人魚は陸に遊びに来る事もあるそうよ。もしかしたらこの街にも来ているかもしれないわね」

母親からそう言われてレイナルドはひどく興奮した。もしかしたら自分を助けてくれた人魚もふらりとこの街に来ているかもしれない、と思ったからだ。

その日から、レイナルドは街を歩けば常に視線を動かすようになった。

海を目にすれば海面を、海面から覗いている岩の上を、見つめるようになった。
唯一覚えている珊瑚色と水色だけを頼りに、ひたすらにその色を探し続けた。

もうすっかりと無意識のうちに海面や岩場を探す癖がついてしまったレイナルドは、この日も小さく息を落として海から陸へと視線を転じると緩やかな坂道を登り始める。なだらかな丘の上に海を見下ろすように建っている建物の中でも随分と古く大きい屋敷が領主邸で、レイナルドの帰る家だ。さっき貰った果実の残りを口に放り込んで、今日も収獲なし、と溜息を落とした。

◇

「今夜は満月か」
窓から見上げた空に輝く丸い月に、今晩は風も穏やかだし少し歩くかと、レイナルドは屋敷を出ると砂浜へと向かう。月の光をきらきらと反射させている海面を眺めながら、ランプなど要らないくらいに皓々と照らされている丘をのんびりと下っていたレイナルドの耳に、その時微かに歌声が届いた。

「これは……」

レイナルドは足を止めて耳を澄ます。

そして次の瞬間、全速力で丘を駆け下り始めた。

『よく頑張ったわね、もう大丈夫よ』

朦朧とする意識の中で聞いた声。あれからもう十五年もの時が経ってしまっている。記憶が正しいのかも分からない。話す声と歌声は印象が変わるから、話してみたら全く違う声かもしれない。

けれどレイナルドは聞こえて来る歌声に、跳ねる鼓動のままに足を動かした。

砂に足を取られながら波打ち際までやって来たレイナルドは、沖に一隻の船影を見つけてあぁなるほどと納得する。

人魚族は歌う事が好きな種族なのだと言われている。そして船を見かけると『祝福の歌』を贈るのだそうだ。今聞こえている歌も、きっとあの船に祝福を贈っているのだろうと思いながら、レイナルドは海面から覗いているいくつかの岩を見回して——見つけた。

見えている範囲では一番遠い岩の上に、一人の人魚が座っていた。
月の光を受けて輝く髪は、もうずっとずっと探し続けていた珊瑚色の混ざった水色。
叫びそうになりながらも、レイナルドは必死でその衝動を抑えた。
人魚の歌は、船乗りの間では「聞けたらその航海は安全を約束され、幸福がもたらされる」などというジンクスがあるくらいに珍しいものだ。
祝福を贈っているのであろう人魚にも、ジンクスに沸いているかもしれない船の為にも、歌を遮っては申し訳ないと、じりじりする気持ちを抑えて歌が終わるのを待った。
細くあまり抑揚のない不思議な旋律の歌声がふつりと途切れたその時、レイナルドは人魚に向かって呼びかけた。
突然掛けられた声に岩の上に居た人魚が驚いたように振り返って、ほんの束の間レイナルドを見つめると、次の瞬間するりと吸い込まれるように海に潜ってしまった。
小さな飛沫だけを残して、人魚の姿は完全に海の中に消えてしまう。
今までそこに人魚がいた事が嘘のように凪いでいる海面を呆然と眺めていたレイナルドは、けれどぱしゃんと小さな水音が立った事ではっと視線を動かした。

レイナルドのほんの少し先。
手を伸ばせば触れられそうなすぐそこの海面に、先程の人魚が顔を覗かせていた。

「今晩は。素敵な夜ね」
微笑みながら発されたその声に、レイナルドはあぁと溜息のような声を落とした。
たった今掛けられた声と、記憶の中の声とが、ぴたりと重なったのだ。
「やっと、見つけた――」
呟いたレイナルドに、人魚は小さく首を傾げた。

続きは製品版にてお楽しみください♡

シロツメクサの王冠を貴方に

椎名さえら

海に囲まれたパルメーア王国。
獣人たちと人間たちが共存しているこの国の片隅で、シェイは人として生を受けた。

幾分暖かくなった春の気配が漂う中、彼女は慣れた小道を歩いていた。周りには色とりどりの野花が咲き始め、白や黄色の蝶が蜜を求めてひらひらと舞っている。しばらく歩いていると、辺りにはまったく人家がなくなり、潮の香りが増してきた。

海を見下ろす崖の上に目指している木造の小屋はひっそりと立っている。
「アレックス、シェイよ」
返事がないことは想定内だ。この家は鍵がかかっていることが滅多にない。試しに、ぎぎっと重い扉を押し開くと、簡単に開いた。
ちょうど昼食を食べている最中だったらしい、古ぼけたテーブルに座っていた男が彼女を見返してきた。細身ではあるものの筋肉質であることは　一目で分かる均整の取れた体つきに、銀色の髪に銀色の瞳。肩まで伸びている癖のない髪はゆるくひとつにまとめられている。ぞっとするくらいに目鼻立ちの整った顔は、男らしいというよりは中性的な印象を与える。

彼がこの家の主人、アレッサンドロである。

かつてはそれなりの高貴な家の育ちだったらしく、名字もあったらしいが詳しいことは知らない。

「今日も来たのか」

アレックスが呟いた。低いバリトンボイスで、声だけを聞けば、線の細い容姿の持ち主だとはとても想像がつかない。彼が持っていたスプーンから手を離すと、カランと無機質な音を立てた。

「うん」

シェイは狭い厨房へ移動すると、持ってきたバスケットの中身を出し始めた。

「そしてまた持ってきたのか……いらないと言っているのに」

「でもせっかくの、初物の果物だし。これ、アレックス好きでしょう？」

手元にある桃色の果物を見せる。皮をむいても桃色で、甘くて美味しいこの国の特産物のひとつだ。目の前に座るこの美しい男は、意外にもかなりの甘党である。それも果物に目がないことをシェイはよく知っていた。

「なくても生きられる」

そっけない限りだが彼は止めもせず、椅子に座ったまま肘をついてシェイを見守っている。シェイが自分のすることを曲げないこと、また彼女がどうしてそうするのか、アレックスはよく理解している。

「これから果物が美味しい季節なんだから、少しでも楽しんでほしいの」

シェイの返事を聞いたアレックスが鼻を鳴らして食事に戻ったので、彼女は勝手知った厨房で、果物ナイフを取り出すとみずみずしい果実の皮を剥き始めた。珍しい果物ではないので、街に行けば安価で手にはいるけれど。

（アレックスが街に行かないのは……私のせいなんだから）

◇

アレックスと出会ったのは、いまから九年前。

シェイはまだ十一歳だった。

実の父親は幼い頃に蒸発し、母親は夜の商売をしていた。彼女はその頃には新しい男の

家に入り浸り、時たま気まぐれに、子どもたちに生活費を落としに帰ってくるくらいだった。

シェイには七歳年上の兄、ウエスがいる。

ウエスは思春期を迎えたあたりから夜遊びに勤しむようになった。またウエスは家には帰ってくるものの、気分屋であり、シェイをいじめ倒した。ときにはならず者の友人たち――人間ばかり――を家に引き入れ、女たちも引き込んで乱交を始める。シェイはそんなときは何も聞かないように部屋の扉に鍵をかけた。毛布をかぶってクローゼットに閉じこもり、時間がすぎるのをただただ待った。

シェイにとって、生きるということは、苦痛でしかなかったのだ。

ある冬の日。母親が置いていったなけなしの生活費をウエスに取り上げられ、今から自分の女がくるからお前は家を出ていけと言われて、寒空の下、着の身着のまま追い出された。ウエスはその日、街で友人との賭け事に負けたらしく、過去最強に機嫌が悪かったから、ただのうっぷん晴らしの、手酷い妹いじめだった。

力でウエスに勝てるはずもなく、シェイは惨めな気持ちでどこに行くあてもなく走り続

けた。もうこんな世界にいたくない。三十分後、泣きながらシェイは今まで一度も行ったことのなかった、街外れの崖に立っていた。

飛び込んでやる、と絶望的な気持ちでここまできたはいいが、いざ立つと足が震えた。死ぬのは全ての煩わしさから解放されることだと思ってはいたが、三十メートルはあるだろう高さを上から覗き込み、荒い波が容赦なく崖にぶつかっている光景をみると途端に怖気づいた。

……行く場所がない。
けれど飛び込む勇気もない。

震える身体を叱咤して、一歩だけ前に進もうとしたとき、ぱしりと腕をつかまれた。
「おい、死ぬ気か？」

振り向くとそこには、見たこともないくらい綺麗な男が立っていた——それがアレッサンドロだった。夕暮れの、太陽の光に彼の銀色の髪が輝いてシェイの瞳には映った。ウエ

スの連れてくる、ならずもののごろつきたちとは全然違う品格が漂っているのが子供にも分かった。

（なんて綺麗な……ひとなのだろう）

出会った瞬間、アレックスをひと目見たシェイは彼の抱いている圧倒的な孤独感を感じ、またそれに強烈に惹きつけられた。なぜなら孤独というものは、シェイが生まれてからずっと彼女の側にあったものだったから。

「行くところがないなら、ついてこい」

「いいの？」

「目の前で死なれたら目覚めが悪い」

そして、その頃彼が住んでいた家に彼女を連れて行ってくれた。行く場所がないならここにいたらいい、と言って温かいお茶を出してくれた。

それからもウエスに家を追い出される度に、おそるおそる彼の家を訪ねると、ぶっきらぼうな反応ながらも彼は家に招きいれてくれた。

シェイのぼろぼろの服も、薄汚い身体もひと目見たら、虐待されていると分かるだろうに、アレックスは何も言わずにただただ側に置いてくれた。彼は黙って、食べ物を分け与

えてくれて、身体を洗うようにと浴室を貸してくれた。

アレックスが沸かしてくれたたっぷりのお湯と柔らかい布を使って初めて身体を洗った夜、あまりの気持ちよさにシェイは震えた。今まではせいぜい湿った布で拭うくらいしかできなかったからだ。最初のお湯は自分でも驚くくらいに真っ黒になってしまったが、数回洗い込んでいるうちに、透明のままになった。そのお湯で布も綺麗に洗った。

ほかほかした身体で浴室から出ていくと、アレックスがシェイを見て眉間に皺を寄せた。

「どうしたの？」

「――なんでもない」

彼はそう呟くと、すぐに視線を反らした。

続きは製品版にてお楽しみください♡

R18 獣人と執着 小説アンソロジー

ヒロインは獣の愛に囚われ、もう逃げられない【準備号】

発行日：2021年5月2日

蜜色カンターレ（@mitsu_cantare）

マチバリ（@matiba_ri）
https://xmypage.syosetu.com/x5934ba/

待鳥園子（@machidori55）
https://xmypage.syosetu.com/x5256bn/

赤井茄子（@a_ka_na_su）
https://xmypage.syosetu.com/x4092bf/

和泉和歌（@izumi_moonlight）
https://xmypage.syosetu.com/x8472bi/

水野恵無 ★代表（@mizuemu）
https://xmypage.syosetu.com/x2920z/

桜月みやこ（@miyakok18）
https://xmypage.syosetu.com/x4050s/

椎名さえら（@saerasheena）
https://xmypage.syosetu.com/x3388bp/

2021夏
電子書籍にて販売予定！

♡情報は蜜色カンターレアカウントにてチェックしてくださいね♡

この本はR-18です。18歳未満の方の閲覧は固くお断ります。
本文および表紙は作成中のものであり、正式配信時には変更なる場合があります。
無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載（SNS・動画配信含む）は禁止です。

illustration：漣ちなみ　/　表紙デザイン:マチバリ　/　本文デザイン：桜月みやこ